

K-53 /

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第35集

# 一ノ坂

## 一ノ坂遺跡発掘調査概報 第 2 集

平成 4 年 3 月

1992

米沢市教育委員会

# 一ノ坂

## 一ノ坂遺跡発掘調査概報 第2集

平成4年3月

1992

米沢市教育委員会

## 序 文

本市教育委員会は、国内最長の大型住居跡が確認された一ノ坂遺跡の範囲で、将来において開発が予想される地域を中心に、3ヶ年計画で、国の援助を受けながら、調査を実施しております。

文化庁並びに山形県教育庁文化課の指導のもと、昨年度の第3次・4次調査に引き続き、今年度はその2年度目にあたり、第5次調査となります。

この報告書は、その調査によって得られた成果の概要をまとめたもので、第3次・4次調査の概要是第1集、今年度実施の第5次調査は第2集としてまとめております。

第5次調査区は、第4次調査区の南方箇所であり、竪穴住居跡が8棟確認されました。第4次調査では5棟、第1次の大型住居跡を加えて全部で14棟になります。

第4次・5次調査区は大型住居跡の東方に位置しています。この調査区から確認された住居跡群は互いに切り合って構築されており、本遺跡の存続期間が長期にわたっていたことをうかがわせております。

この調査の目的としている集落跡の形態と遺跡範囲の把握が少しづつ進展してきております。今後は、南方向にさらに延びることが予想される竪穴住居跡群、さらに斜面における土壌群の配置、そして大型住居跡北方の遺構確認が課題であると考えております。

本遺跡の全容解明に向け尽力してまいる所存ですので、関係各位の一層のお力添えをお願い申し上げます。

最後になりましたが、本調査にあたり、格別の御指導を賜りました文化庁、山形県教育庁文化課、さらに多大なるご協力を賜りました丸山亥吉氏、赤木伊勢吉氏に対し、心から御礼を申し上げます。

平成3年3月30日

米沢市教育委員会

教育長 小口豆

## 例　　言

- 1 本報告書は、文化庁の国庫補助を受けて、平成3年度に実施した一ノ坂遺跡「大型住居跡」周辺の開発予定地域の調査概報、第II集である。
- 2 発掘調査は、米沢市教育委員会が主体となって、宅地造成関連に伴う試掘調査を平成3年6月11日、大型住居跡確認に伴う周辺開発予定地域の調査を、第5次調査として平成3年11月5日～同年11月28日の期間で実施した。

- 3 調査体制は下記の通りである。

調査総括	小関　薰（文化課長）
調査担当	手塚　孝（文化課文化財係主任）
調査主任	菊地政信（文化課文化財係主任）
調査副主任	月山隆弘（文化課嘱託）
作業員	原　三郎、穴沢茂雄、安部ふみ子、石井よそ子、遠藤昭一、加藤文教、 小浦文吉、小関晴雄、黒田よし子、武田房次郎、沢根英夫、佐藤栄吉、 中島国雄、島貫六助、星　努、鈴木由美子
調査協力	丸山亥吉、赤木伊勢吉、赤木友之、堤　薔
調査指導	文化庁、山形県教育庁文化課
事務局	木村琢美（文化課長補佐） 小林伸一（文化課文化財係長） 平間洋子（文化課文化財係主査） 山田　隆（文化課文化財係主任） （敬称略）

- 4 挿図の縮尺は各図面にスケールで示した。

- 5 本書の作成は菊地政信が担当した。月山隆弘が補佐し、全体的に手塚　孝が総括した。責任校正は小林伸一がその責務にあたった。

## 本 文 目 次

(表紙題字は米沢市教育委員会教育長 小口 亘による)

序 文

例 言

目 次

1	遺跡の概要と調査に至る経過	1
2	調査の経過	1
3	検出された遺構	3
	住居跡	3
	土壤	8
4	検出された遺物	10
	土器	10
	石器	11
5	まとめ	14

## 挿 図 目 次

第1図	一ノ坂遺跡グリット配図	1
第2図	一ノ坂遺跡第5次東側調査区遺構全体図	5
第3図	一ノ坂遺跡第5次調査出土石器実測図(1)	12
第4図	一ノ坂遺跡第5次調査出土石器実測図(2)	13
第5図	一ノ坂遺跡第5次調査HY6出土土器拓影図(1)	16
第6図	一ノ坂遺跡第5次調査HY7出土土器拓影図(2)	17
第7図	一ノ坂遺跡第5次調査出土石器拓影図(3)	18
第8図	一ノ坂遺跡第5次調査区遺構全体図	19
第9図	一ノ坂遺跡第4次・5次調査住居跡変容概念図	20

## 図 版 目 次

第一図版 一ノ坂遺跡第5次調査の発掘(1)

第二図版 一ノ坂遺跡第5次調査の発掘(2)

第三図版 一ノ坂遺跡第5次調査の発掘(3)

第四図版 一ノ坂遺跡第5次調査出土の土器(1)

第五図版 一ノ坂遺跡第5次調査出土の土器(2)

第六図版 一ノ坂遺跡第5次調査

## 1 遺跡の概要と調査に至る経過

### ○遺跡の概要

本遺跡は米沢市街地の西方約2kmに位置する。遺跡周辺の地形は笹野山丘陵の西端となる羽山山麓から東側に張り出した、緩やかな舌状微高台地で、標高は259m～261mである。

本遺跡の発見は昭和20年（1945）頃と云われる。その後、昭和37年頃から置賜考古学会会員によって、分布調査や試掘調査等を行っている。一連の調査により、石器類を中心とした多量の遺物を確認している。

遺跡範囲は東西220m×南北310mあり、現況は宅地、畑地、果樹園等である。本遺跡は複合遺跡であり、縄文前期初頭が中心で、縄文中期中葉、同後期初頭、中世の遺物を出土している。

### ○調査に至る経過

平成元年度（1989）、本遺跡範囲内に宅地造成の申請があった。これを受けて、本市教育委員会は、申請地一帯の試掘調査を実施した。その結果、遺物が確認されたことから関係機関と協議し発掘調査を実施した。この調査を第1次調査と呼ぶ。

第1次調査では大型住居跡1棟と130万点に上る遺物が確認された。これらをふまえ文化庁及び山形県教育庁文化課の指導のもと、米沢市教育委員会は国庫補助を受け、開発予定地における遺跡確認調査を3ヶ年計画で実施するに至った。

平成元年に第1次・2次調査を、国庫補助を受けた初年度の平成2年に第3次・4次調査を実施しており、今年度は2年目の第5次調査にあたる。

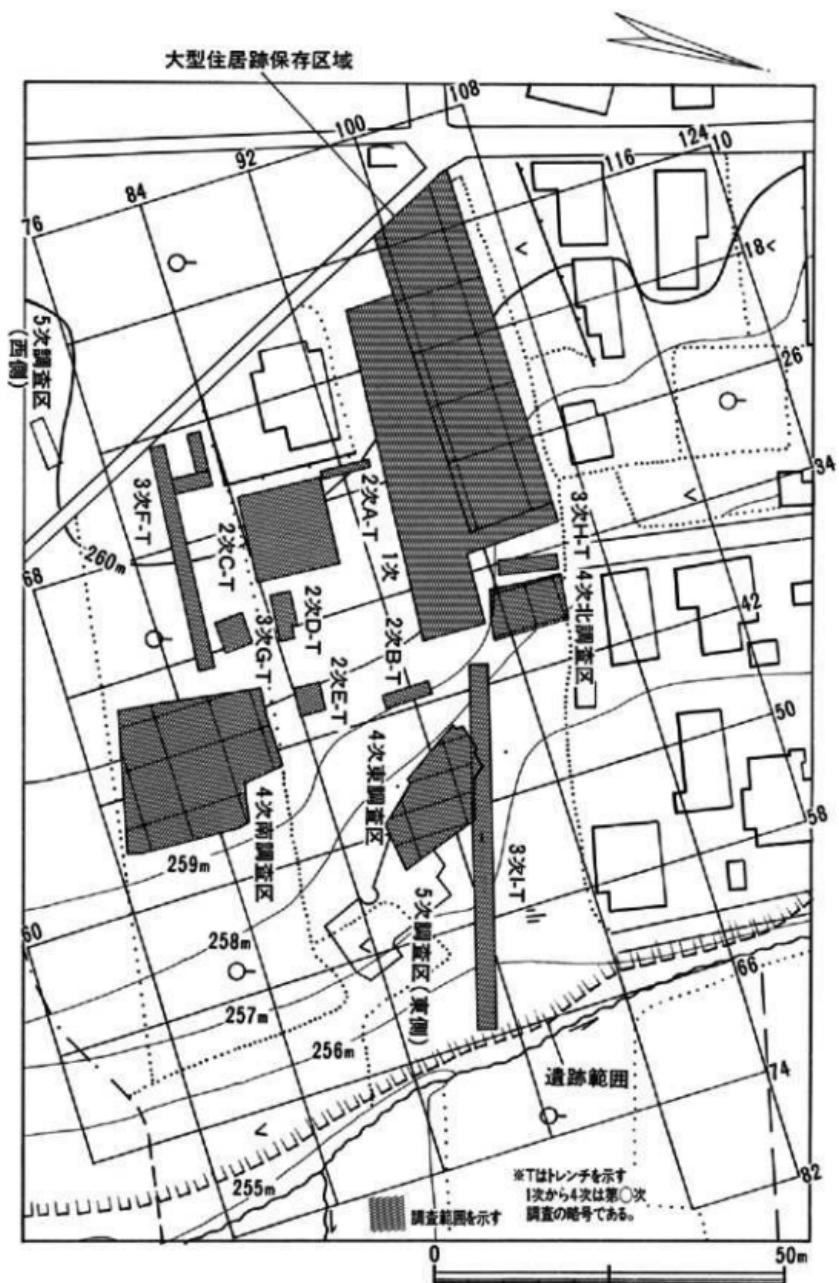
平成2年度の調査区は第1図で示す箇所であり、大型住居跡の東方斜面及び、河岸段丘上に立地する。この調査区からは、土壌群、竪穴住居跡群が確認された。年代は縄文前期初頭で、大型住居跡と同一年代である。これらの住居跡群は南方に延びる様相を呈していることから、今年度の調査区を、第4次調査区と隣接する南部地点とした。

## 2 調査の経過

6月11日に実施した調査は、開発予定地の中央部に4m×14mのトレンチを配し精査をおこなったが、遺物・遺構は確認されなかった。調査地点は第1図に示した箇所である。1日で終了した。第5次調査区東側地点は11月5日から開始する。

重機が入って行けない場所であり、表土剥離は人力で行ない2日間を要した。遺構確認面は耕作土直下で、後世の土地利用による攪乱箇所が認められた。

面整理と精査を同時に進め、重複した住居跡プランを確認した。住居跡の番号は第4次調査からの通し番号とし、今回はHY6からとする。遺物はこれまでの調査区と比較すると、少量であった。11月という調査期間であったが、幸い天候にも恵まれ、11月27日に現地説明会を開催する。その後に埋めもどして、11月28日に今回の調査を終了した。調査面積は160m<sup>2</sup>である。



第1図 一ノ坂遺跡グリッド配図

### 3 検出された遺構

今回の第5次調査で検出された遺構は、東側調査区を中心に竪穴住居跡HY 6からHY 13の8棟を始め、DY 2・4の土壙2基がある。調査区は南北約16m、東西は約9mの範囲であり、竪穴住居跡は重複して確認された。HY 6・7の床面下にはさらに、竪穴住居跡が構築されているのが認められたが、時間の都合上掘り下げは実施しなかった。また、果樹の立木周辺及び、斜面をさけた発掘範囲であるため、完掘したのはHY 6・7・9・10の4棟だけであった。配置については、第2図を参照願いたい。HY 6からHY 13の順で以下に述べる。

#### HY 6

○平面形状が長方形形状を呈し、東西方向に長軸を有す。長径600cm、幅373cmを計る。HY 7と8を切って構築された、竪穴住居跡である。(以下「住居跡」と言う。)

○柱穴跡(以下「柱穴」という。)は壁直下にP91～P122の32本が確認された。柱穴の間隔は平均20cm位であるが、西側のP117～P118の様に60cmを測る柱穴もある。深さは最深でP121の62cm、浅いのはP111の21cmであり、平均は約40cmであった。やや内側に傾く掘り方で、地山まで達するが多い。

○壁は西側で43cm、東側44cm、北側と南側は40cmを計り、直角に近い立ち上りを示す。周溝は認められなかった。

○覆土は16枚観察され、黒褐色、暗赤褐色の土色で、土質はさらさらしている。覆土からは、土器、石器、礫器が検出されている。

○床面はほぼ平坦である。炉跡は確認されなかつたが、住居跡の西側コーナー部床面の礫群には焼成を受けた痕跡を有すものも含まれていた。

○出土遺物は土器、石器、礫器がある。土器は破片で占められ281点、石器は剝片193点、完成石器6点、礫器は凹石4点、磨石3点となる。これらの出土遺物の中で、図面を必要と認識された土器41点、石器3点について図示した。

第5図に拓本で示したのが、HY 6出土の土器群である。土器片は深鉢形土器口縁部片11点と胴部片270点、石器は第3図の11石匙未完成石器、第4図17の石匙、第4図36の石鎧状石器が出土している。

#### HY 7

今回の第5次調査区のより、確認された住居跡群の中では、最大規模を有す住居跡である。HY 6・8によって、西方を切られ、西北部ではHY 9を切って構築した様相を呈す。

○平面形状は帯状を有し、長軸方向は前述したHY 6と同様である。長さは13.6m、幅は385cmを測り「ロングハウス」の仲間として分類される。

○柱穴はP123～P175の52本を確認した。住居跡の北西に関しては、後世の削平により確認は困

難であった。全体的な状況から推測すれば、60本前後であったと想定される。

柱穴の間隔は東方で45cm、南方で20cm～40cmを測る。深さは40cm～50cm、直径は平均20cmである。

○壁は30cm～33cmを有し、直角に近い立ち上りを呈す。周溝は認められなかった。

○覆土は8枚観察され、暗褐色、黄褐色の土色で、礫を含むのが特徴である。覆土からは遺物も認められ、住居跡東側覆土に集中する傾向を示していた。

○床面はほぼ平坦である。炉跡は確認されなかった。床面からは遺物も出土している。

○出土遺物は土器片163点、剝片109点、完成石器24点、凹石7点、磨石3点が検出されている。

土器片は第6図と第7図106、石器は第3図1、2、5、6、8、11、14、第3図16と18～20、25、第3・4図29、31、32、34、第4図38、41、第4図42、43に示した。器種別では、石錐4点、石匙10点、尖頭状石器7点、石窓状石器1点、スクレーパー1点、磨製石斧1点。土器片は、深鉢形土器の口縁部片10点、胴部片148点、底部片5点であり、5個体分の土器片が出土している。

#### HY 8

住居跡の中央部を後世の削平箇所が占める地点の検出であり、全容は不明である。HY 6によって南側を切られ、HY 7を切って構築している。

○平面形状は東西に長径を有す、長方形を呈すものと想定される。長径は前述した理由によって不明である。幅は280cmを測る。

○柱穴はP176～P183の8本だけ確認した。深さは30cm位で、平均20cmの円形状を呈す。

○壁は緩やかに立ち上り、深さは西方で21cm、東方で20cmを測る。HY 6・7よりも浅い掘り方である。

○覆土は7枚確認された。土色は黒褐色で、小礫を少量含む。遺物は覆土の4・5層を中心に認められた。

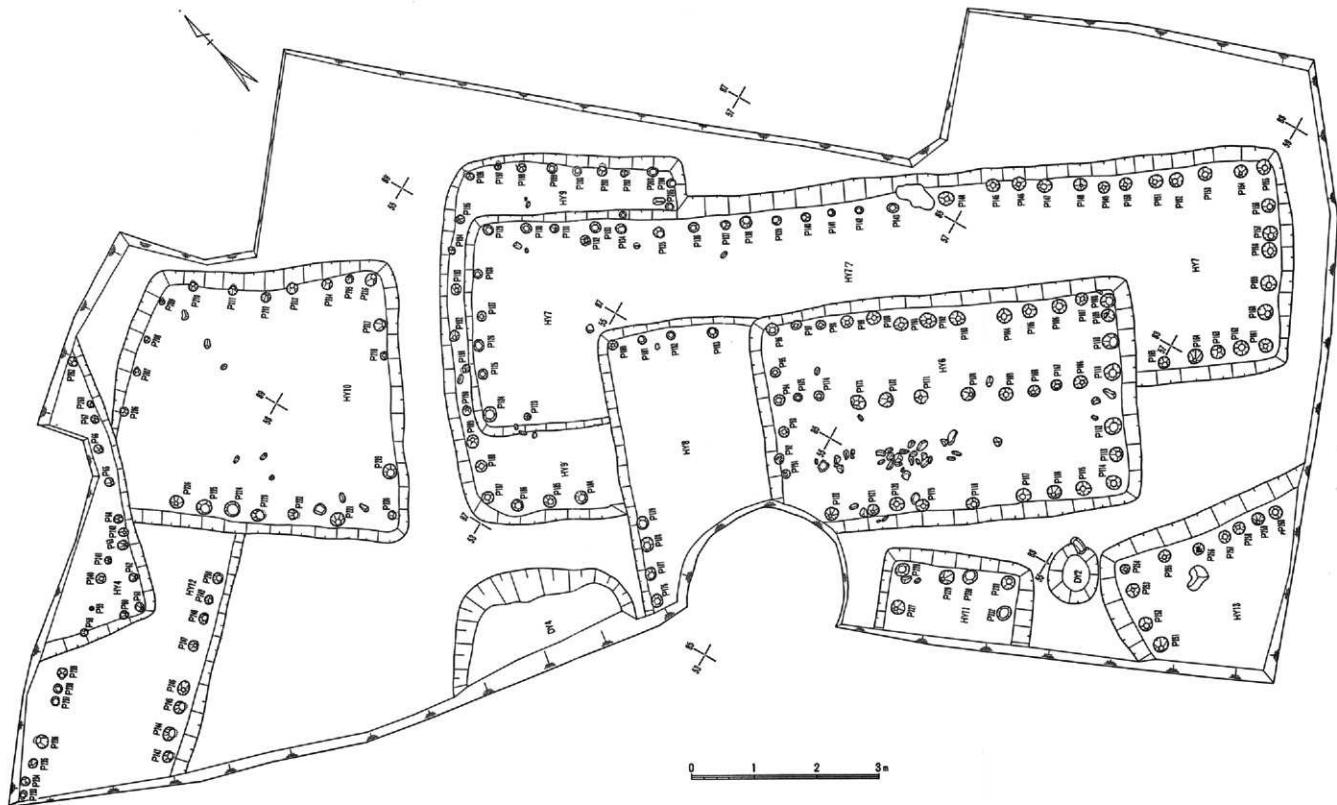
○床面は後世の削平によって、中央部が欠損した状況であった。その場所以外は平坦である。

○出土遺物は土器片12点、剝片6点、凹石1点、磨石1点である。土器は第7図84に示した土器片である。剝片の中には石槍の失敗品1点が含まれている。土器片は、深鉢形土器胴部片で占められる。

#### HY 9

東西方向に主軸長を有す、住居跡である。HY 7・8によって、全体の3分の2以上が切られている。

○平面形状は長方形を呈し、主軸長565cm、幅365cmを有す。東方の北方コーナー部が、やや丸味を帯び、隅丸方形を一部呈している。



第2図 一ノ坂遺跡第5次東側調査区遺構全体図

○柱穴はP184～P205の22基認められ、本来は30～34本で柱穴が構成されると想定される。柱穴の間隔は平均30cm位である。内側に傾く様に掘り込んでいる柱穴が多く認められた。深さは平均すると30cmを有す。

○壁はほぼ直角に立ち上がる。東側で22cm、西側で20cmで、東側壁の一部が木の根により、崩れた状況を呈していたが、他は良好である。HY8と同様に浅い掘り方であった。

○覆土は6枚で、小礫を含むのを特徴とし、遺物も少量認められた。土色は暗褐色、黒褐色であり、比較的堅い土質であった。

○床面は平坦である。中央部をHY7によって切られており、炉跡は確認できなかった。

○出土遺物は土器片27点、剥片20点、完成石器3点が出土している。土器片は第7図85～91、石器は第5図22、24、27である。石器は石匙で占められる。土器片は深鉢形土器口縁部片3点、胴部片24点であった。

#### HY10

○平面形状が方形を呈す住居跡で、第4調査のHY5と類似する平面形状である。北西コーナー部をHY4によって切られ、西から延びるHY12を切って構築している。この住居跡の上面から縄文中期の一括土器が出土している。一边の長さは405cmを測る。

○柱穴はP206～P226の21本が確認された。南部の柱穴が存在しない箇所は、後世の削平によるもので、この箇所にも柱穴が存在した可能性は高い。これを考慮すれば、30本位で構成されると推定したい。柱穴の間隔は40cm～50cmで円形状に掘り込んでいる。深さは平均30cm位である。

○壁は直角に近い立ち上りを呈し、東で37cm、西で32cmを測る。

○覆土は6枚に分けられる。土色は暗褐色と暗赤褐色で粘質であり、遺物と小礫を含む土質であった。

○床面は平坦である。炉跡は確認されなかった。

○遺物は土器片20点、剥片17点、石槍1点（欠損面有り）、凹石3点、磨石4点が検出され、第7図92、93に図示した2点は、深鉢形の口縁部片である。他の土器片は胴部片で占められる。

#### HY11

住居跡の東側端部を発掘したにすぎず、全容は不明である。幅は250cmを測り、柱穴は壁直下にP227～P232の6本を確認した。HY12と長軸が同方向を呈す構築である。

遺物は土器片9点、剥片13点と少量であった。第7図94は深鉢形土器口縁部片、他は胴部片であった。

#### HY12

第4次調査で、プランを確認したが、掘り下げを実施しなかった住居跡である。HY4・10に

よって東側を切られている。第4次調査では、HY3がHY4を切っていると報告しているが、今回の精査により、HY4が、HY3を切って構築していると判明した。この紙面で訂正したい。

○平面形状は、長方形を呈すと想定されるが、全容は不明である。幅は約260cmと推測する。

○柱穴はP233～P239、P59、240～P242～P250の19本確認した。P59、240～242はHY4の床面に確認された柱穴であり、P59は第4次調査で確認している柱穴であった。

○壁は緩やかに立ち上る。北西部の壁は第4次調査と今回の第5次調査との、丁度境にあたる箇所であり、明確に把握できなかった。

○覆土は10枚認められ、地方及び南方方向からの自然堆積状況を呈す。暗赤褐色、黄褐色の土色で微砂質土の土質である。

○床面はほぼ平坦であり、炉跡は検出されなかった。

○出土遺物は土器片4点、剥片8点、石槍1点と少ない。土器は第7図95・96の他に2点検出され、すべて深鉢形土器胴部片である。石器は第4図40であり、欠損面を有す石槍である。

#### HY13

調査区の南西コーナー部に位置し、北東コーナー部を精査した住居跡である。風倒木坑が重複したプラン確認状況であった。

○平面形状は不明と言わざるを得ないが、検出された住居跡の中ではHY10に類似する方形状を呈すと推測される。

○柱穴はP251～P260の10本確認している。間隔は30cm～50cmを測り、深さは平均で40cmを有す。東側の柱穴群は、西側柱穴群よりも小規模な形状を呈す。

○覆土は4枚観察され、礫を含む。礫は風倒木によるものと理解され、大形の礫も認められた。

○床面は土器片30点、剥片18点、石匙3点、石鍤1点、凹石1点が検出されている。土器は第7図97～108に示した土器群である。深鉢形土器口縁部片9点を始め、胴部片21点であった。石器は第3図3と、同図9・12、第3図25である。

#### DY2

平面形状が、橢円形状を呈す土壤で、長径95cm、短径82cmを測る。ポール状に掘り込んでおり深さは23cmである。上端部東方に礫が確認されている。遺物は出土していない。

#### DY4

半分だけ完掘しており、平面形状は大形の不整方形を呈すものと想定される。現況で長径290cm、短径は不明である。竪穴状に掘られ、壁は直角に近い立ち上りを呈す。覆土は10枚確認され、自然堆積状況を有す。遺物は、土器片17点、剥片15点が、覆土及び底面近くから検出されている。

表1. 積穴住居跡観察表

※土器片は深鉢形の破片である。

※( )は現長、単位cm

遺構名	調査区	形状	出土遺物
H Y 1	第4次調査区 (1990年度)	長方形状 (365)×4,200	土器92点
H Y 2		長方形状 710×415	石族1点、尖頭器1点、糸巻形石器1点、石匙2点 土器1014点
H Y 3		長方形 (700)×345	土器358点
H Y 4		長方形状 (300)×375	土器243点、石鉗2点
H Y 5		隅丸方形状 525×428	土器19点
H Y 6	第5次調査区 (1991年度)	長方形状 600×373	口縁部片11点、胴部片270点、石匙2点、尖頭器2点、石錐1点、石竈1点、剥片193点、凹石4点、磨石3点、焼石1点
H Y 7	第5次調査区	長方形 1,360×385	口縁部片10点、胴部片148点、底部片5点、石匙10点、尖頭器7点、石錐3点、石竈1点、剥片109点、凹石7点、磨石3点、焼石1点
H Y 8	第5次調査区	長方形状 ?×280	胴部片13点、尖頭器1点、石槍、剥片6点、凹石1点、磨石1点
H Y 9	第5次調査区	長方形状 565×365	口縁部片3点、胴部片24点、尖頭器1点、石匙3点、石錐2点、剥片17点
H Y 10	第5次調査区	方形状 405×405	口縁部片2点、胴部片18点、尖頭部1点、凹石3点、磨石4点、剥片17点
H Y 11		? ?×250	口縁部片1点、胴部片9点、剥片13点
H Y 12		長方形状 ?×260	胴部片4点、尖頭器1点、剥片8点
H Y 13		? ?×?	口縁部片9点、胴部片21点、石匙3点、石錐1点、剥片18点、凹石1点

#### 4 検出された遺物

第5次調査区からの出土遺物は、土器片690点、剝片642点、完成石器62点、礫器36点であった。大半の遺物は住居跡覆土、床面からである。これらの遺物に関して、土器片は122点、石器は44点について図示した。出土した縄文前期初頭の土器は、第1次調査から第4次調査によって検出された土器群と、同時期に位置するものであり、胎土に多量の纖維を含む特徴を有す。

一連の調査区から比較すれば、少ない遺物の量であった。また、第1次調査で確認された大型住居跡に認められた。多量のチップやクルミの炭化物は検出されなかった。以下、土器、石器の順で、図示した遺物を中心に説明を加えたい。

##### ○土器〔第5～7図〕

竪穴住居跡覆土及び、床面からの出土が大半である。復原可能な土器は一点もない。時期別では、縄文前期初頭（関山式併行）で占められるが、（大木8a式併行）も一個体分出土している。拓本で示した土器を中心に概要を述べる。

器種は深鉢形土器で、口縁部は淨状口縁と平縁の両者が認められる。底部は平底で文様を施すのを特徴としている。装飾文様は籠状工具や、半截竹管を用いた矢羽根状刺突文や刺突文による山形文、「コンパス」文、それに他には縄文原体を利用した羽状縄文、結束羽状縄文、「ループ」文等で構成している。器形は胴部が幾分膨らむものと、底部から緩やかに外反して口縁部に至る形態に大別される。文様表出技法や文様構成から、下記の土器が認められた。

##### ○装飾文様を施すグループ

主として口縁部に構成されるものと推測される。第7図97は円形状の突刺文を、中心に半截竹管を用いて平行・山形、菱形文を単位文様とし、さらに交互突刺文を鋸歯状に配した文様構成である。他に無文帯を配す。第5図35、37～41、第6図75～78、第7図113、117、118、122があり、地文はループ文が多い。無文帯は菱形状を呈すものと推測される。

さらに、第6図42の様にコンパス文や、同図43の平行沈線、同図44の沈線によって方形に区画するものがある。43は、小形鉢形土器の口縁部片である。

第7図108は、粘土を豆粒状に貼付し、半截竹管による突刺文、平行沈線を施す文様構成である。破片であることから、全体の構成は不明と言わざるを得ない。

○器面全体に羽状縄文、斜状縄文、末端ループ文、組紐縄文、結束縄文等を施文するグループがある。器形は平縁が大半を占めるが、第5図4や第7図112の様に、口縁部が波状を有し波頂部が尖状を呈すものも認められた。

第6図46・69は、綾織文の地文に結束縄文の結束部を重層施文したものである。

○底部文様として、第6図80～83がある。半截竹管による同心円状文、80・83や、縄文原体を押圧した82、棒状工具による斜状の細沈線文などがある。

## ○石器〔第3・4図〕

石材はすべて真岩を使用し、縦長剥片を素材として調整を加えた石器が大半である。器種別に列挙すると、II群石器（尖頭器）5点、III群石器（石錐）7点、IV群石器（石匙）15点、VI群石器（石寛状石器）3点、VII群石器（石槍）1点、VIII群石器（スクレーパー類）2点、X群石器（欠損面有す石器）7点、XI群石器（磨斧）1点であった。これらの石器群について、列挙した順に説明を加えたい。なお、石器の分類に関しては当市発行の報告書に記した基準によるもので、第8集の24頁～36頁を参照願いたい。しかしながら、本遺跡出土の石器に関しては後日に詳細に述べる用意がある。

### II群石器〔第3図28～31、第4図42〕

片面調整を基本とし、両端部に尖状を呈す形態に整形されている。これらの石器は縁辺に使用痕は認められなかった。第3図28～31は形状から判断して、つまみ部を整形する以前の石匙と推測される。29には押圧剥離面も観察される。第3図13・15なども石匙の製作途上における失敗品と言えそうである。第4図42は、石寛状石器の製作途上品であろう。

### III群石器〔第3図1～7〕

つまみ部と錐部から成る石錐の形態を有す。いずれも小形であり、一次剥離を残して縁辺より整形し、錐部は両面調整によって整形している。6は錐部が欠損している。いずれも使用後が錐部に認められた。

### IV群石器〔第3図9～12、16、27〕

今回検出された器種の中で、最も多数認められた石器である。擬形石匙であり、縁辺とb面には、使用による磨滅痕が観察される。実測図に実線で示した縁辺箇所が使用縁辺である。

本群石器は完成石器と、製作段階における失敗品と、断念品に細分さるが、従来の分類に従ってつまみ部を整形した形態を本群石器とした。第1次調査で確認された大型住居跡からは、第3図13の形態に類似する石器が多量に認められ、大型住居跡石器製作場であった事を窺わせる資料である。

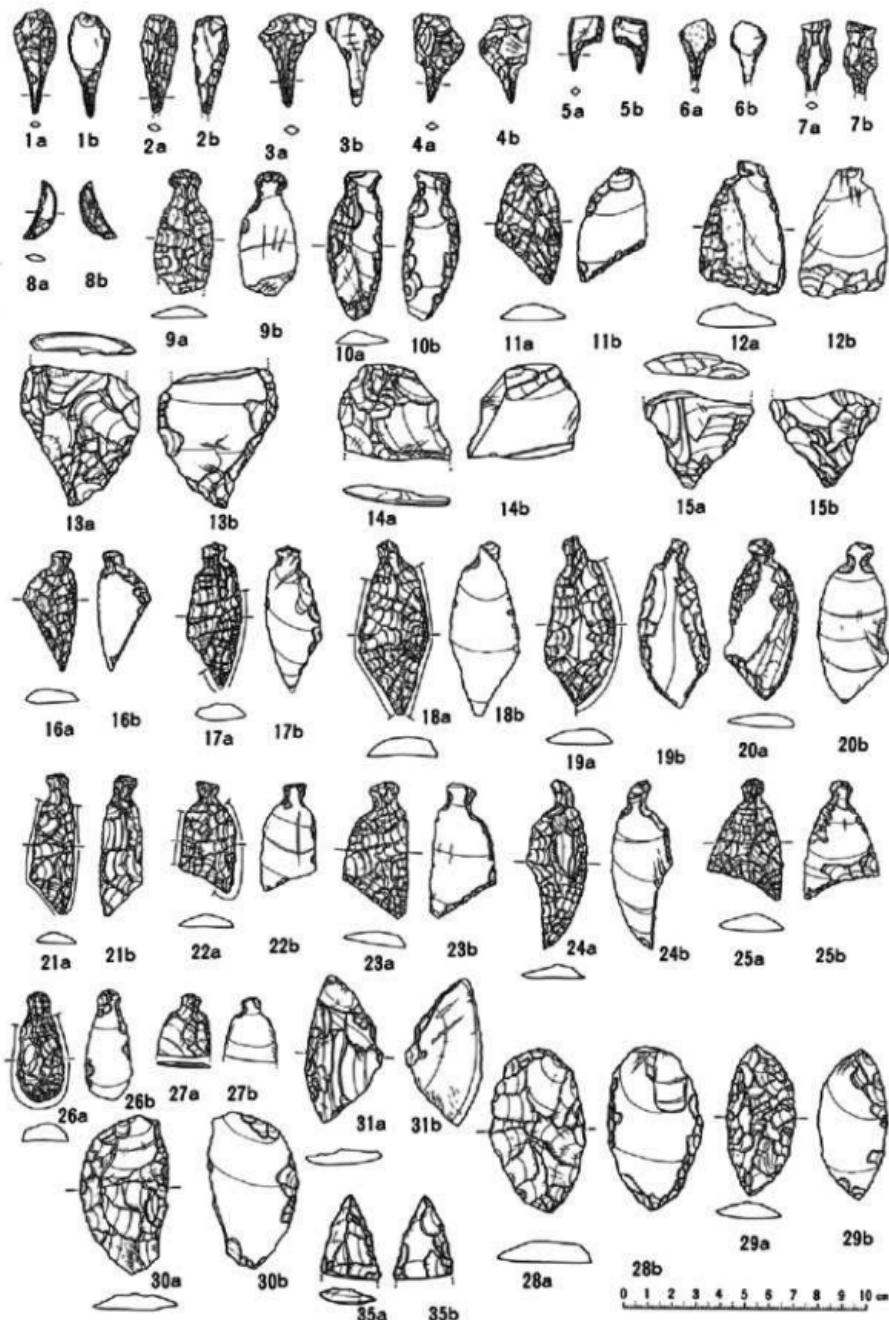
石匙は製作された後、使用による縁辺の変容が著しい石器と理解され、第3図16・22は再調整を繰り返した最終形態と想定される。

本群完成石器は3形態に細別される。第3図19・20・21の様に尖頭部を有すタイプ、第3図12の様に平坦なタイプ、そして第3図26の様に丸味を有すタイプである。

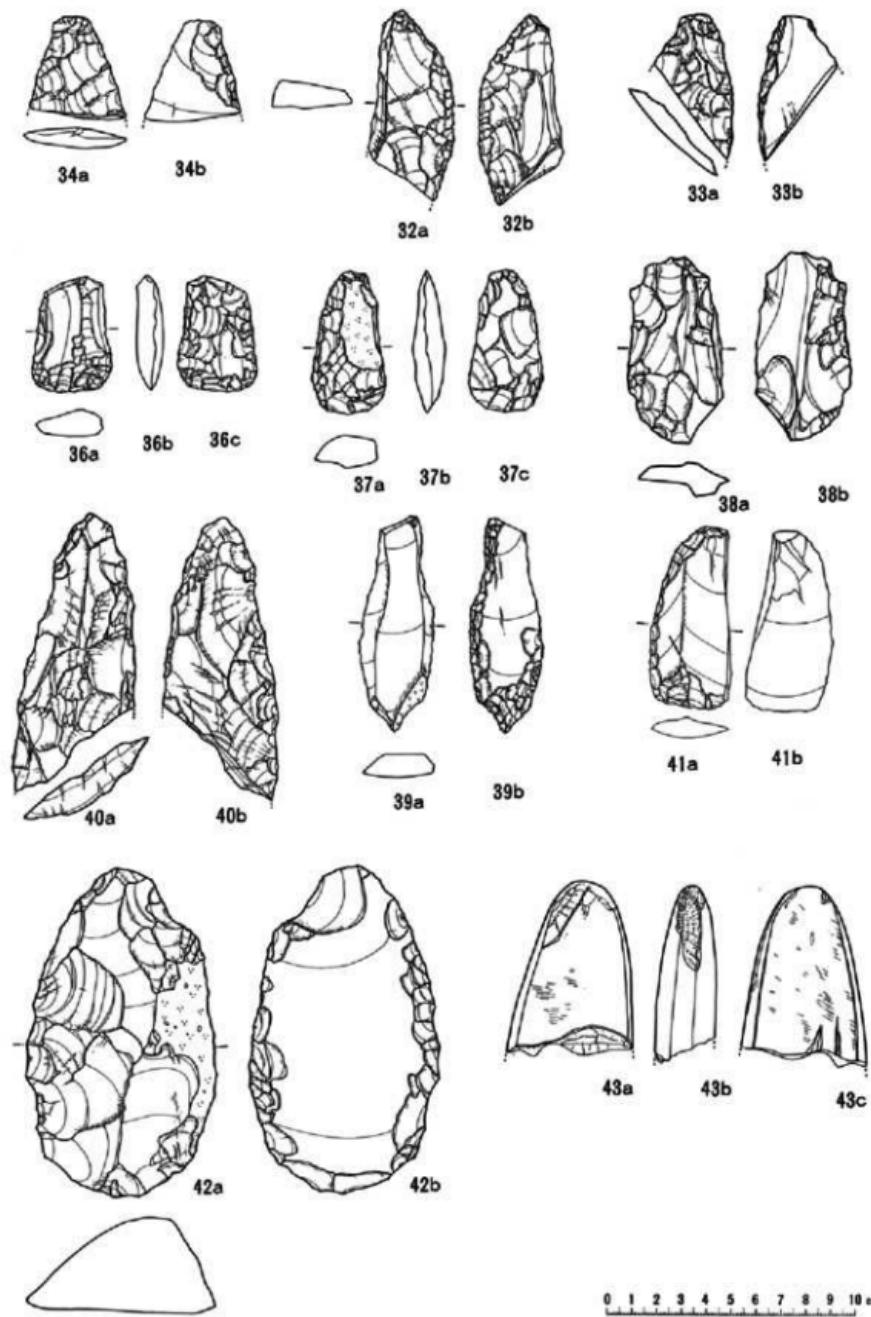
### VI群石器〔第4図36～38〕

小形の石寛状石器で両面調整により整形された石器群である。38は剥離面及び断面の観察から製作断念品と想定される。36・37とも製作後使用された期間が少ない石器である。

### VII群石器〔第4図40〕



第3図 一ノ坂遺跡第5次調査出土石器実測図(1)



第4図 一ノ坂遺跡第5次調査出土石器実測図(2)

欠損面を有す石器で、HY12より1点出土している。両面調整によって整形され、尖状部を有す形態である。今回の調査区からは1点だけであったが、一連の調査区からは多量に認められた石器群であった。尖状を呈す石器には石槍・石鉛、両尖ヒロの3形態が本遺跡より出土しており、欠損面を有すこれらの石器群がどの石器の失敗品なのかが問題となる。

#### VII群石器〔第4図39・41〕

片面調整によって整形された石器であり、剥片の素材がわかる簡単な調整である。2点とも縁辺に使用痕は観察されなかった。

#### X群石器〔第3図13・14・15、第4図32～35〕

本群石器の中には、石匙、石槍、石鉛の製作途上における失敗品が多い。これらは尖状を呈す形態が多く認められた。

#### XII群石器〔第4図43〕

青緑色の蛇紋岩を素材とし、全面を研磨により整形した磨製石斧で、刃部が欠損している。本遺跡出土の磨製石斧でこの石材を使用しているのは他にはない。

#### ○礫器

住居跡を中心に出土している。凹石21点、磨石17点が認められた。石材は安山岩を使用しているのが多い。磨石の中には縁辺を使用した面取石若干ある。

#### 5 まとめ

第5次調査区の遺構・遺物についてまとめると次の様になる。

- ①平面形状は長方形を呈すものが多く、方形状も若干認められた。
- ②壁は深く直角に近い形態で掘り込んでいる。
- ③主柱穴を持たない壁柱穴で上部構造を構成する。
- ④周溝や炉を床面に持たない。

以上の4点が特徴として挙げられ、第4次調査区より検出された竪穴住居跡群と類似する。さらにこれらの住居跡群は、南方に延びる様相を呈す。

遺物は少量であり、完形土器は認められなかった。石器では石匙が多く、縁辺に使用痕を有す形態であった。石鉛や両尖ヒロは出土していない。

第1次調査の大型竪穴住居跡発見以来、今回の発掘調査で第5次を数える。当初、河岸段丘上に集落を構成しているものと推測していたが、一連の調査を総合すると、本遺跡は河岸段丘の第2及び第3河岸段丘上を利用して集落を構成していたことが次第に明確になってきた。

今回検出された竪穴住居跡は8棟、第4次調査では5棟、第1次調査の大型住居跡（ロング・ハウス）加えてすると14棟になる。その中に2棟のロング・ハウスを含んでいる。

これらの竪穴住居跡は、遺物が多量に出土するものと少量しか遺物が出土しない竪穴住居跡に

分けられる。前者は第1次調査のロング・ハウス、後者は第4次・5次調査の竪穴住居跡群である。両者は一ノ坂遺跡を構成する竪穴住居跡群であり、両者の相違は集落においてそれぞれの竪穴住居跡がもつ役割の相違と理解したい。

また、東一帯の住居跡群13棟は、互いに切り合って構築されており、本遺跡の存続期間がある一定の時間的空間を示したことを意味する。

第4次調査区の竪穴住居跡群は第I期から第III期に細別している。1991年度の米沢市教育委員会発行の埋蔵文化財報告書第30集「一ノ坂遺跡発掘調査報告書概報」第I集の21頁に図示してある。この第I集の第9図は訂正し、第II集第9図を参照願いたい。理由は第5次調査の精査によつて、HY4がHY3を切つて構築していると判明したことによる。ちなみに第I集ではHY3がHY4を切つて構築していると報告している。

遺物は、一ノ坂遺跡の調査区としては少ないが、他の縄文前期初頭の遺跡と比較した場合、今回の出土量は一般的である。

第8図にこれまで検出された一ノ坂遺跡の縄文前期初頭の遺構を示した。最高地の平坦箇所を囲む様に構築されている様相を呈している。北側にロング・ハウス（第1次調査）、東方斜面に土壙群（第3次調査）、そして東方斜面下に竪穴住居跡群（第4・5次調査）が重複して配置され、一ノ坂遺跡の集落構成が少しずつ解明されつつある。

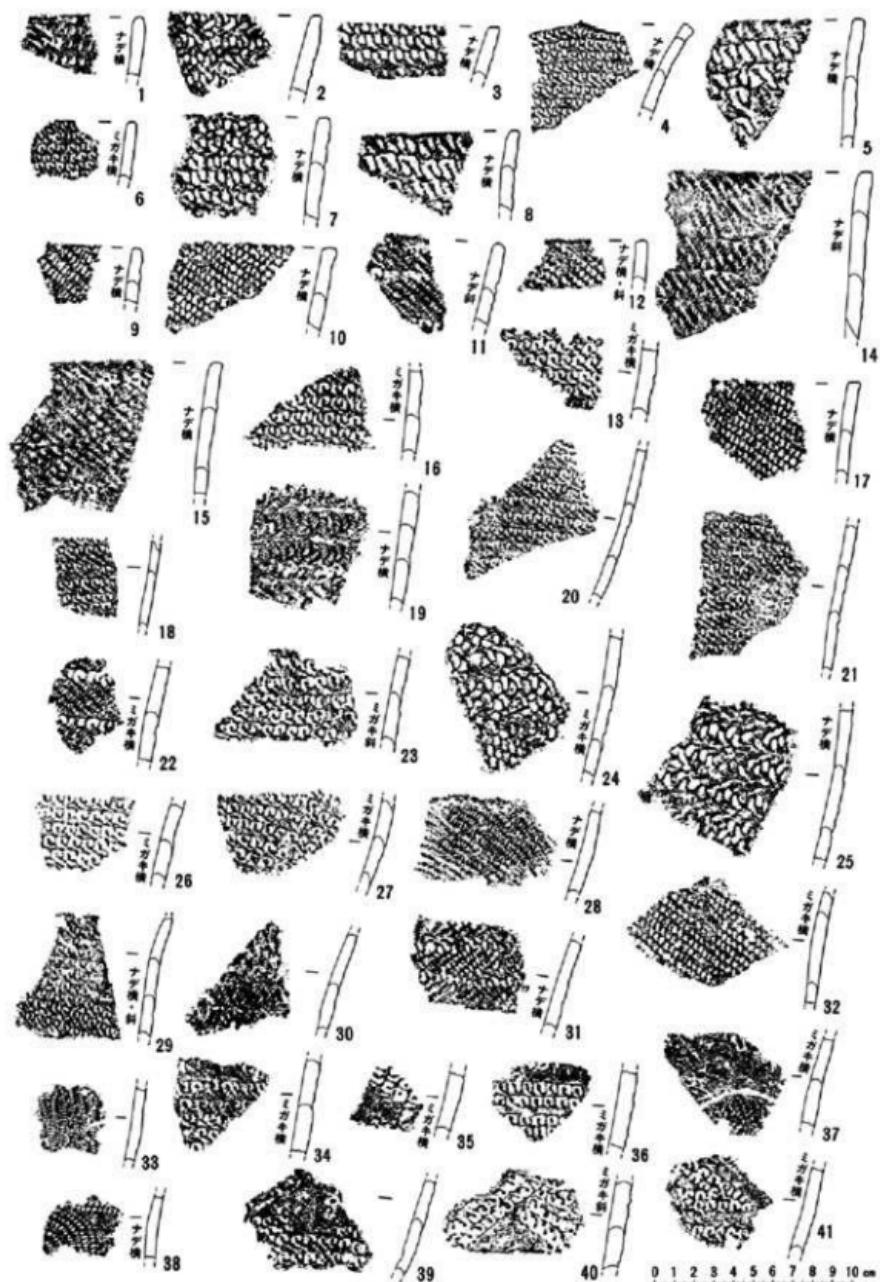
前述した様に、本遺跡の約半分を精査したと想定され、大型住居跡のもつ意味がしだいに明らかになってきたと思われる。

第9図に示したのはI期からIV期の住居跡変容概念図であり、各時期に大型住居跡が付随するすれば、I期はHY1, 2, 9, 11の4棟、II期はHY2, 7, 10, 13の4棟、III期はHY3と5, 8の3棟、IV期はHY4, 6の2棟となる。これはあくまで仮説であり、当初から大型住居跡が付隨した根拠については土器の分析をまたなければならない。

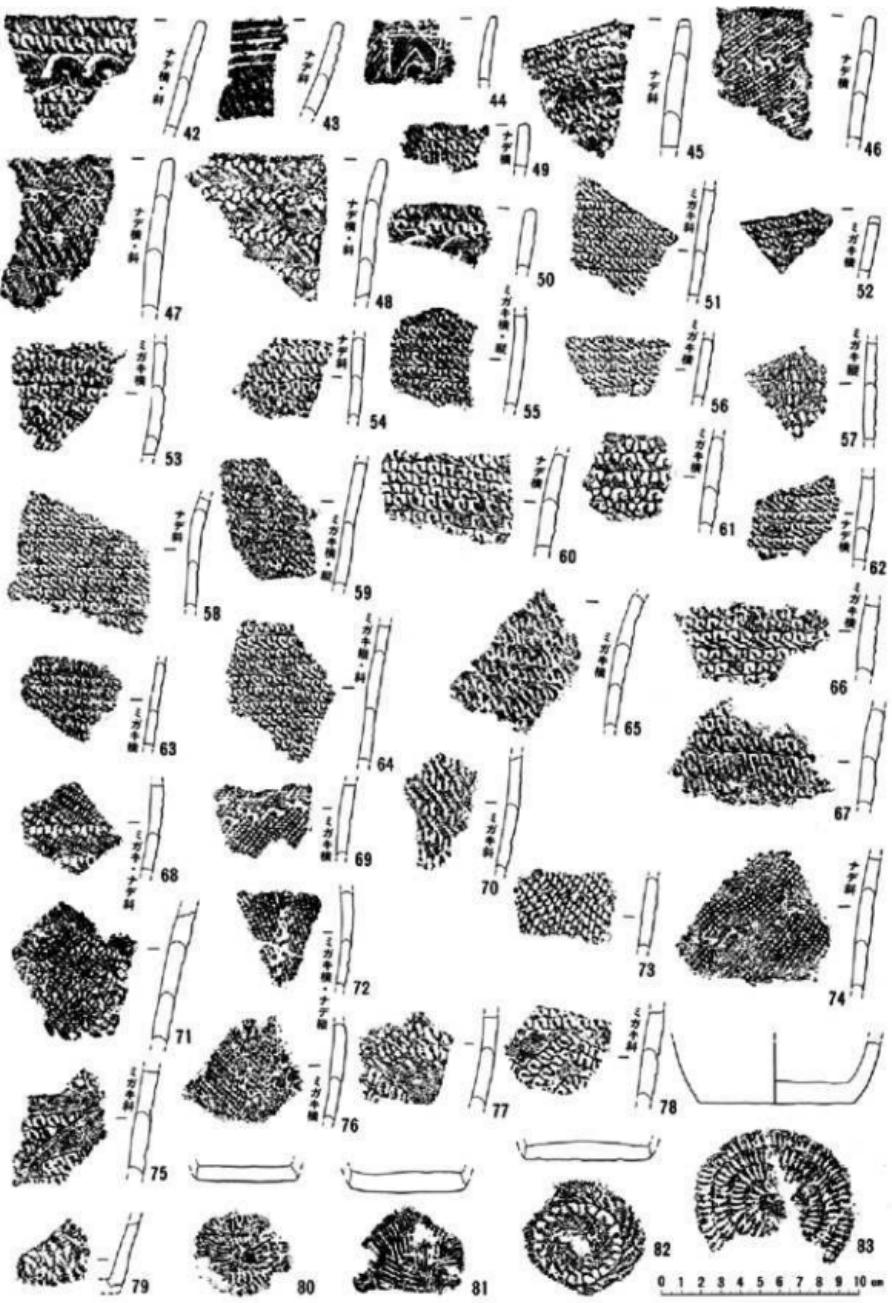
集落を構成する場合、ひとつのパターンとして成立→発展→衰退が考えられる。私見として第1次調査のロング・ハウスはすべての時期において、利用された施設、すなわち石器製作場と考えたい。多量の剥片、製作途上の失敗品石器、炭化物、加工工具を主体とした完成石器（石匙や石錐）の遺物は、石器製作場に加えて食料の加工場であったことを示している。

さらに、他の竪穴住居跡より豊富な土器、床面に構築された5基の地床炉は、生活の場であったことをうかがわせている。成立→発展→衰退の一連の変容が、東方斜面直下に重複して構築された住居跡群をその結果としてとらえる事が出来そうである。

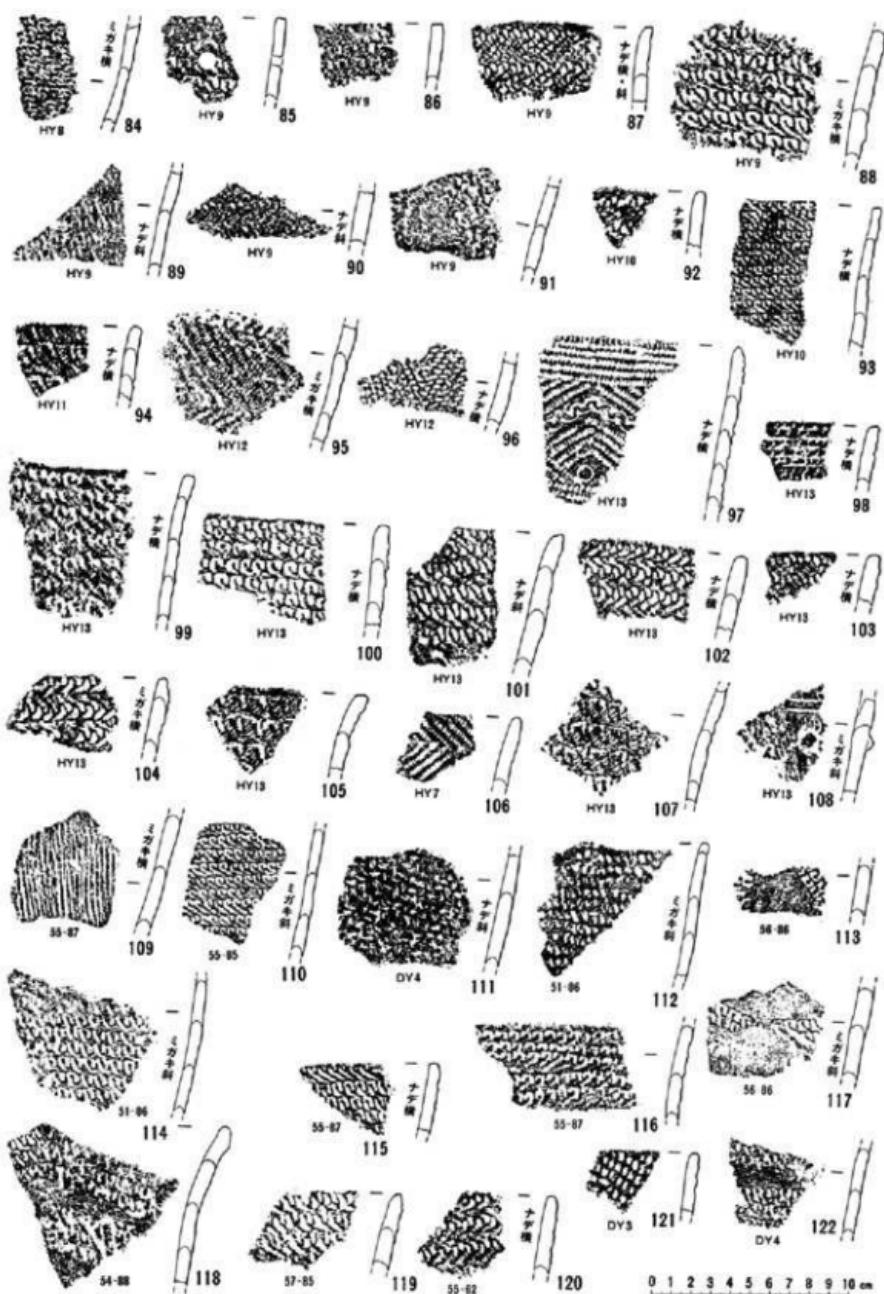
ロング・ハウスはどのような目的で建てられたのかについては多くの意見があるが、本遺跡においては上記の事項より、「生産工房」として位置付けが可能である。最後になりましたが、今回も御協力いただきました、丸山亥吉氏、赤木伊勢吉氏、赤木友之氏に御礼申し上げます。



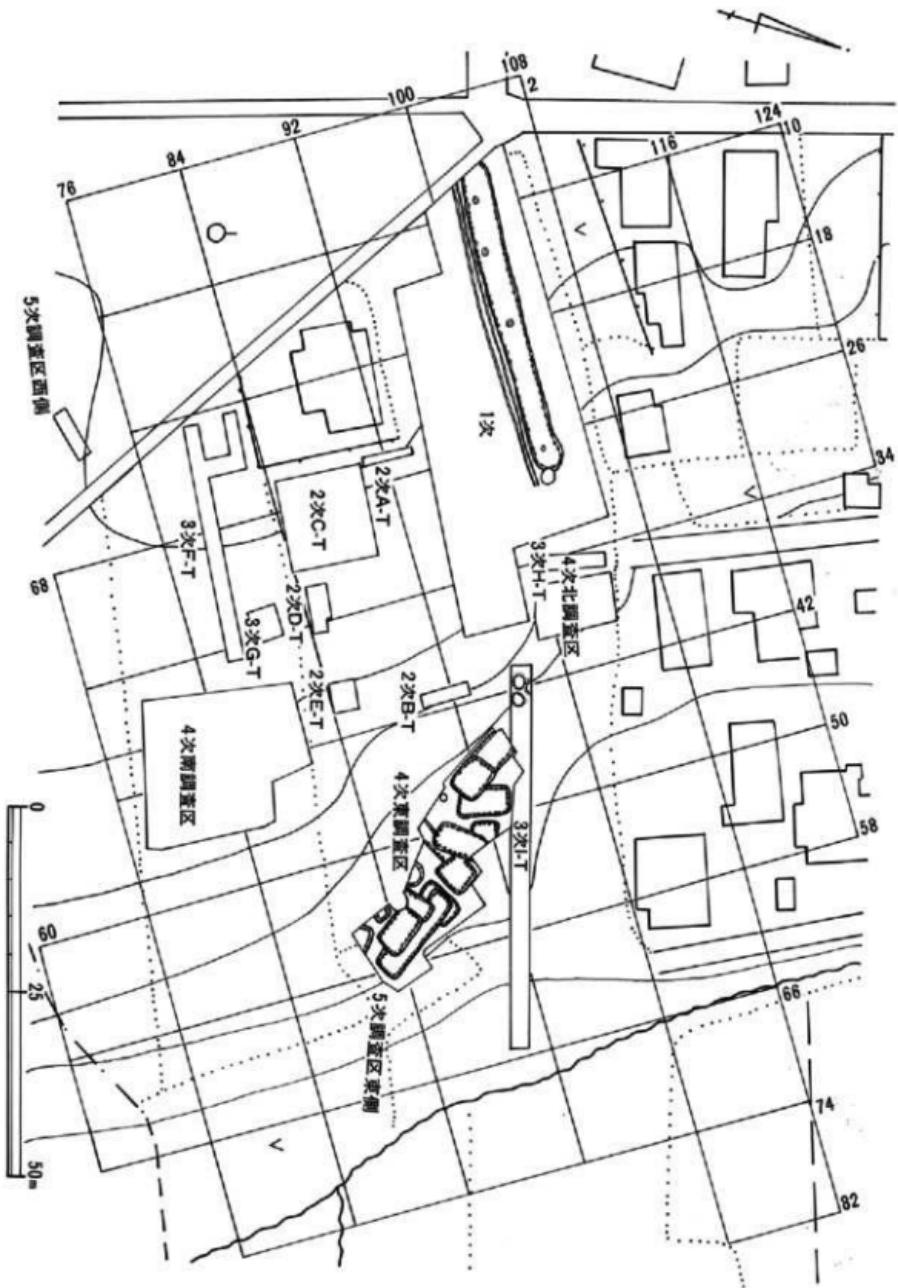
第5図 一ノ坂遺跡第5次調査HY6出土土器拓影図(1)



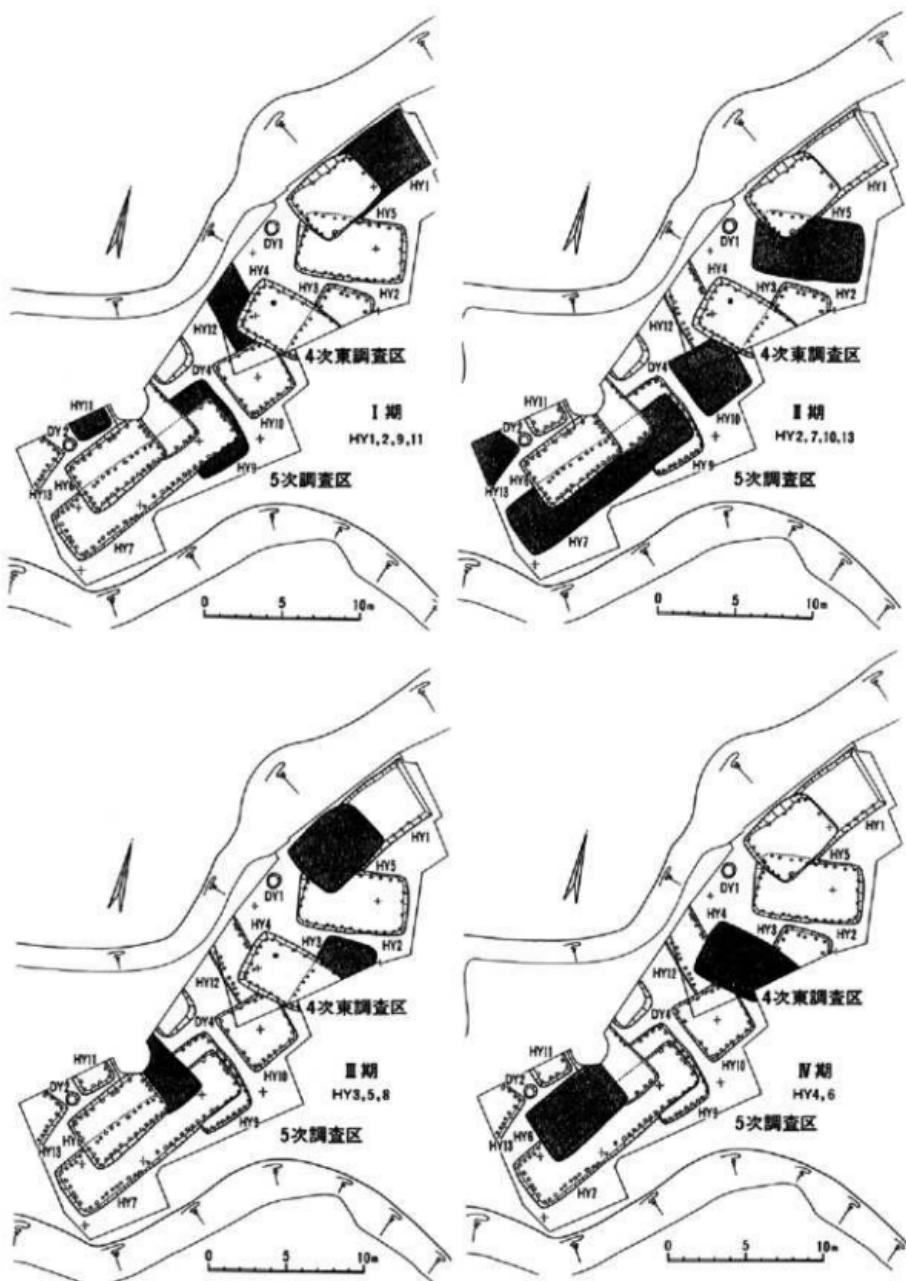
第6図 一ノ坂遺跡第5次調査HY7出土土器拓影図(2)



第7図 一ノ坂遺跡第5次調査出土土器拓影図(3)



第8図 一ノ坂遺跡調査区遺構全体図



第9図 一ノ坂遺跡第4次・5次調査住居跡変容概念図

写 真 図 版



▲プラン確認状況（南方より望む）



▲HY 6 完掘状況（南方より望む）



▲HY 9のセクション状況（南方より望む）



▲DY 3のセクション状況（北方より望む）

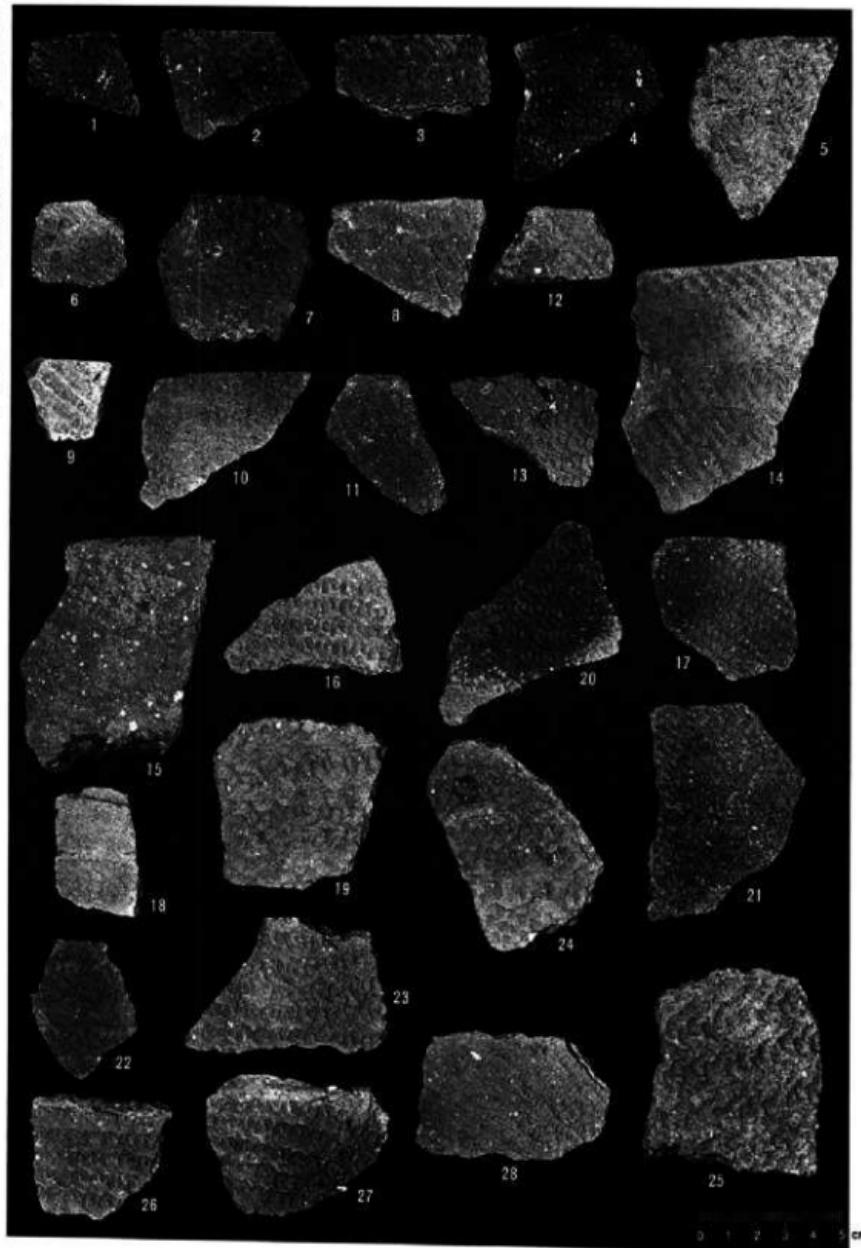


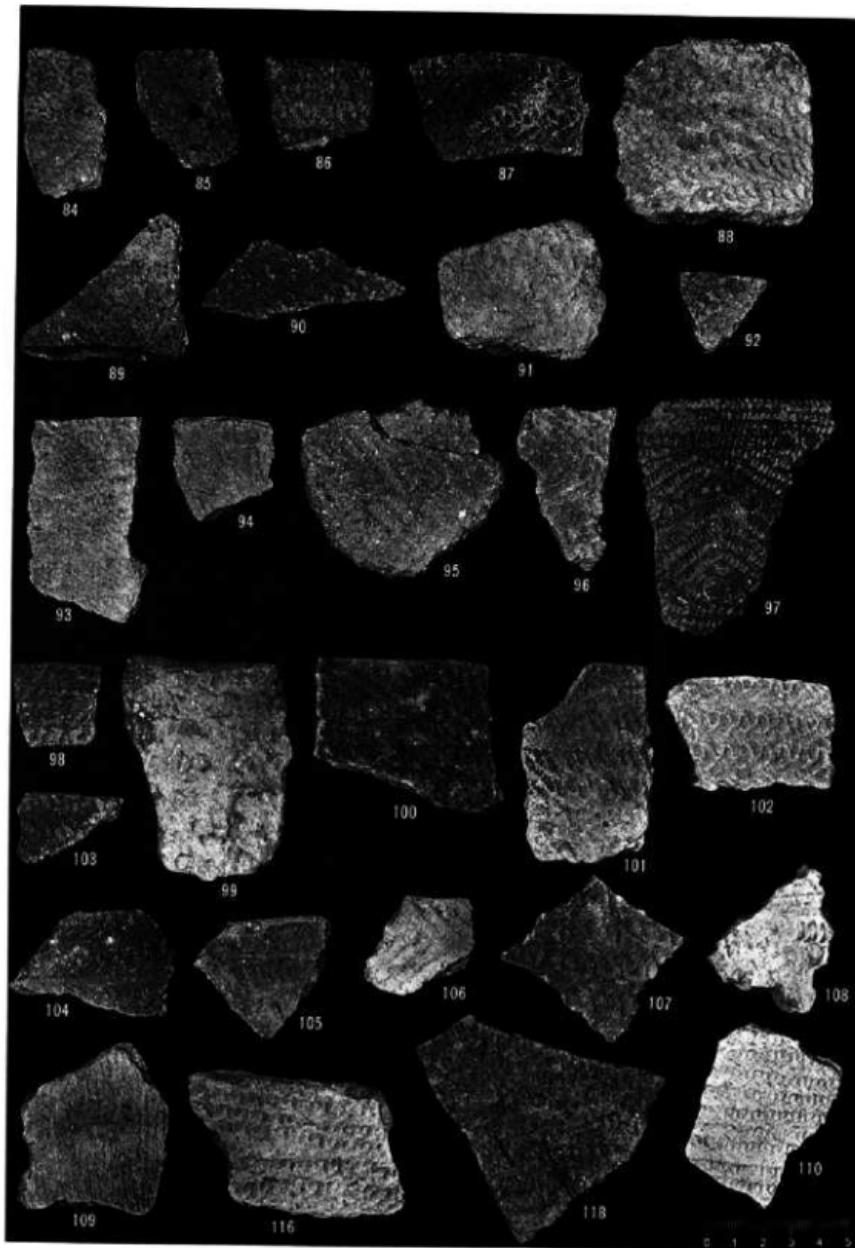
▲造構全景（南方より望む）

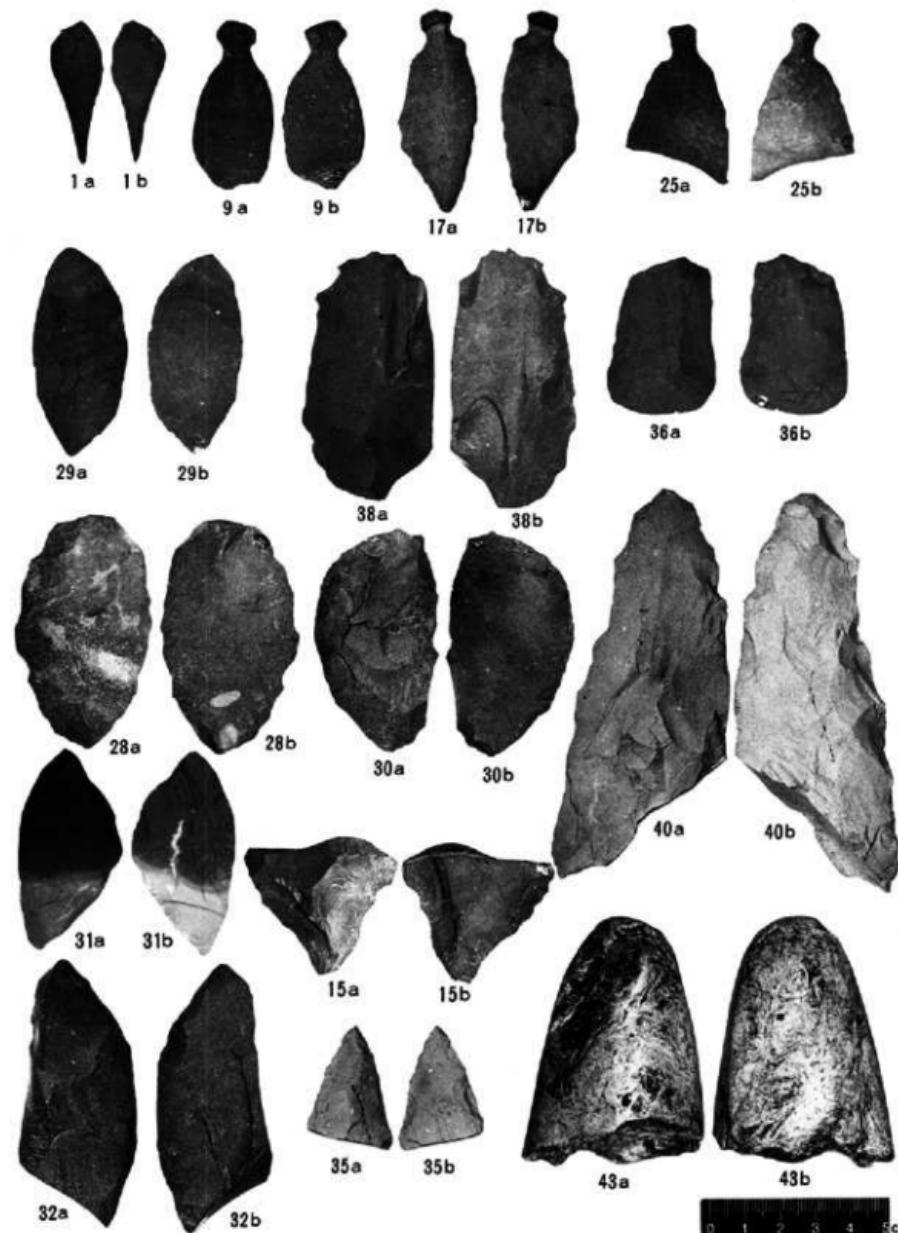


▲造構全景（北方より望む）

第四四版  
一ノ坂遺跡第五次調査出土の土器(一)







米沢市埋蔵文化財調査報告書第35集

一ノ坂  
一ノ坂遺跡発堀調査概報  
第2集

平成4年3月25日 印刷  
平成4年3月30日 発行

発行 米沢市教育委員会  
米沢市金池五丁目2-25  
TEL(0238)22-5111  
(内線727・728)

印刷 永井印刷株式会社  
米沢市下花沢1丁目2-16  
TEL(0238)23-0693